

〈評価規準〉 A：目標を上回った B：ほぼ目標どおり C：目標を下回った

1 学校が楽しいと思える生徒の育成（生徒が行きたいと思える学校づくり）						B	
(1) わかる、できるようになる授業づくり		(2) 良好な人間関係ができる学級経営と学習集団づくり		(3) 寄り添い支援する教員姿勢と教育相談			
担当	目標・現状	具体的計画	今年度の達成基準	中間達成状況	評価	最終達成状況評価	総合
教務課	(1) ①学習5や授業を受けるときの5つの約束、生徒指導の4つの視点を活用した授業づくりをしている。 ②端末（アプリ）の活用は教員によって差がある。 ③授業アンケートを実施し、授業改善につなげる。	①授業力向上についての研修を学期に1回実施 ②上記の研修と連動させ、端末を活用する機会を提案する ③授業評価委員会と連携し、授業アンケートを年間5回実施する	①向学校アンケートの「授業がよくわかる」の質問、学校自己評価アンケートの9の質問の肯定回答率が80%以上 ②すべての教員が、学期に1回以上端末やアプリを使った授業を行う ③考査ごとに授業アンケートを実施し、授業力の向上につなげる	①該当の質問で全学年80%の肯定回答率を超えた。 ②全教員がオンライン授業を2学期末4回実施した。また、振り返りフォームを行った。 ③授業アンケートを考査ごとに実施した。また、夏季休業中の教員研修で授業実践報告を行い、2学期以降の授業改善につなげた。	B	①該当の質問で1・3年次は90%近く、2年次は80%近くの肯定回答率となった。 ②新しく導入したCanvaや生成AIを使った授業実践を多くの教員が行った。 ③授業アンケートの結果に基づき、自らの指導の柱やポイントを確立させ、授業公開週間で授業公開を行った。のべ見学教員数が50を超えた。	B
生徒課	(2) ①人間関係が閉鎖的であり、自ら人間関係が広がっていきにくい一面がある。その一方、依存的な人間関係を築いてしまうという課題もある。	① 発達支持的生徒指導の推進 ・学校行事を工夫し、つながりを生む取り組みを行う。 ・LHRやSST等で、適切な人間関係構築スキルを獲得させる。	・向学校度アンケートの該当項目の肯定回答率が75%以上になる。 ・アセスにおいて「友人サポート」と「向社会的スキル」の数値（学校平均）が50を超える。	向学校度アンケートの「学校が楽しい」・「みんなで何かするのは楽しい」等の肯定回答率が全学年で80%を超えている。	B	7月の向学校度アンケートでは3学年で「学校が楽しい」の肯定回答率が80%を超えていたが、11月実施では2年次で80%より低い数値となった。ただ、「みんなで何かをするのは楽しい」の質問では3学年とも80%を超え、否定回答数も減少している。学校祭等の行事によって人間関係の変化もあり、心境の変化もあったと考えられるが協力して取り組む楽しみを体感できたのではないかと思う。	A
進路課	(2) ①希望する進路の実現に向けてモチベーションを維持しつつ、見通しをもって学習活動を継続していくことが苦手な生徒が多い。	①6月・11月の進路面談やLHR、日常の働きかけを行うことで、進路意識を高め、進路実現のための具体的な身通しを持たせる。教科担当者と連携して、見通しをもって自分の必要な補習その他学習活動に取り組みさせる。	①学校自己評価アンケートで進路意識に関する項目の肯定的回答率が80%以上になる。進路ノートをホームルーム等(進路マップ前後と各学期末、計5～6回程度)で活用させることにより、学習の計画の立案・見直しができる。	アンケートについて、7月期の結果では、「目標達成のための手段課題を考える」は83%、家庭学習52%、手帳で予定を立てる73%で、いずれも昨年より向上。進路ノートは年次ごとの計画に従って、活用。	A	11月期の向学校度アンケートで「先生に気軽に相談することができる」「授業に主体的に取り組んでいる」「委員会や係活動をしっかりとやっている」の項目で80%以上の生徒が肯定的回答。進路指導の場面や各学期の節目などで進路ノートを使用したが、目標には届かなかった。今後はLHRだけでなく、総探などで対応する計画。	B
学校生活サポートルーム	(3) ①悩みや不安なことを自分から教員に相談できる生徒も多いが、一人で抱えてしまい、休みがちになる生徒もいる。 ②生徒と信頼関係を築きながら、より良い方向へ導く支援が求められている。	①各課と連携し、生徒の変化に気づく観察力を高める。 ③ 面接週間、思春期サポート事業、学校生活サポートルームの運営などを通して、生徒自身の自己受容と、精神的な成長を促す。	①向学校度アンケートの「先生からの理解」「先生に相談したい」など、該当項目の肯定回答率が80%以上になる。	①向学校度アンケートの「先生からの理解」は全て肯定回答率が80%以上である。しかし、2年次生が7月から11月にかけて肯定回答が減少しているため、学校生活の中で個別の声掛けを意識する。また、面接週間等の機会を利用し、生徒の話を受け止める。	B	①向学校度アンケートの「先生からの理解」は全て80%以上であるが、7月の「先生に相談したい」は、1,2年次生が80%を少し下回っていた。11月には上昇がみられるため、今後も継続して、必要な時に相談しやすい体制を整えていく。	B
産社・総探・地域連携	(3) ①産社・総探での学びを充実させて、自己決定の機会を増やし、自己肯定感や自尊感情のさらなる高まりにつなげる。	① 産社・総探・LHRの年間計画に基づき、年次をまたいだ活動や発表活動の機会も設定して、自己肯定感や自尊感情を高める。	① 学校評価アンケートで「ルネス学、産業界と人間、社会貢献活動など、体験的な学びにしっかりと取り組むことができる。」の肯定回答率が80%以上。また、各年次で地域の方や企業の方と関わって活動したり、自己の在り方について考えたりする機会が年間3回以上。成果の発表の機会が1回以上。	①学校評価アンケートで「ルネス学、産業界と人間、社会貢献活動など、体験的な学びにしっかりと取り組むことができる」の肯定回答率が78%。2学期の各年次の具体的な取組を昨年度の反省を活かして充実させる。また各年次で地域の方や企業の方と関わって活動したり、自己の在り方について考えたりする機会が年間3回以上あり、成果の発表の機会が1回以上計画されている。	B	①学校自己評価アンケート(後期)で「ルネス学、産業界と人間、社会貢献活動など、体験的な学びにしっかりと取り組むことができる」の肯定回答率が82%。上半期より5ポイント向上した。11月の向学校度アンケートの「みんなで何かをするのは楽しい」は88%で5月調査より3ポイント向上。経験から自己の成長を振り返る仕組み作りが今後の継続課題。	A

2 「これでいいのか」と常に自問する生徒の育成							B
(1) 自分の今を常に問う姿勢、思考を大切に人づくり (管理から自律へ)							(2) 目標、夢を掲げ、努力する姿勢を応援し続ける
担当	目標・現状	具体的計画	今年度の達成基準	中間達成状況	評価	最終達成状況	総合
教務課	(1) ①知識技能の習得が重視された授業が多く、授業で主体的に取り組んだり、発表したりする機会が少ない。 ②振り返りの充実	①授業に関する教員研修で各教科の授業で主体的に取り組んだり、発表したりする場面の好事例を共有する ②ワークシートや端末の活用で振り返りの機会を設けるとともに振り返りの方法の好事例を共有する	①学校自己評価アンケートの7の質問の肯定回答率が70%以上になる。 ②学校自己評価アンケートの11の質問の肯定回答率が70%以上になる。	①該当の質問で肯定回答率が約75%であった。授業内で自己決定に基づく自己表現活動を行うことが増えたと考える教員が増えた。 ②該当の質問で肯定回答率が87%となった。振り返りに対するコメント返しやフィードバックを行い、活動-評価-改善の流れが定着した。	B	①該当の質問で肯定回答率が72%に下がった。達成基準を超えたが、前回アンケートから下がってしまった。臥龍祭などの学校行事が多かったことから授業に余裕がなくなり、授業内容が教員主導になってしまったと考えられる。 ②該当の質問で肯定回答率が84%に下がった。上記の事柄が原因の一つではないかと考えられる。振り返り自体は多くの教員が実施しているため、実施方法や活用方法を工夫する必要があると感じる。	B
生徒課	(1) ①「正しさ」やルール遵守の意識が定着していない ②校則検討委員会の今後の活動方針が定まっていない。	学級経営の工夫と生徒会活動の充実 ① ・2Rs (Rule と Relation) を大切に にした学級経営を行う。 ・全校集会などを利用し、全校で基準を定めたり、確認したりする。 ② 生徒会執行部や専門委員会と連携し、より多くの生徒の意見が反映されるようにする。	①・向学校度アンケートで教員との関係性に関する項目で肯定回答率が70%以上になる。 ・向学校度アンケートで校則に関する項目で肯定回答率が85%以上になる。 ③ 新しいルールを制定するだけでなく、既存のルールを周知徹底する取組を行っている。	①・向学校度アンケートでの教員との関係性に関する該当項目で肯定回答率が概ね80%を超えている。 ・「校則やきまりを守っている」に関しての肯定回答率も80%を超えている。 ②周知をするためにポスターを教室掲示した。	B	①・向学校度アンケートでの教員との関係性に関する該当項目で肯定回答率が7月実施より11月実施では全体的に肯定回答率は低下している。 ・「校則やきまりを守っている」に関しての肯定回答率も80%を超えている。 ④ 校則についての向学校度アンケート結果は低下したため、生徒会を中心とした取組を行い来年度に生かしていきたい。	B
進路課	(2) ①学校生活全般において受け身で、積極的な取り組みができにくい。日々の生活の取り組みが、希望進路の実現や将来の自分像にどう結びつくのかがイメージできない。	① 進路マップの振り返りや進路ノート・スケジュール帳の活用を通じ、具体的な目標設定をして学習や探究活動などに取り組ませることで、希望進路の実現と日々の取り組みを結びつける。	② 学校自己評価アンケートの「自分の目標達成のために必要な手段や自分の課題を考えることができる」の項目で、肯定回答率が80%以上となる。	① 左のアンケート項目について、7月の結果は1年81%、2年85%、3年82%。進路ノートの定期的な使用により、自己の学校生活の記録をとることで、内省の機会を設けている。	A	① 11月の学校自己評価では「自分の目標達成のために必要な手段や、自分の課題を考えることができる」75.2%、「手帳やスマートフォンを活用して、自分の予定を立てることができる」72%の肯定回答を得た。総合的な探究の時間の内容を見直し、目標や夢に意識を向ける取組を加える予定。	A
学校生活サポートルーム	(1) ①過去2年の傾向として、学校生活サポートルームを利用する生徒が、一時的に過剰な利用になったり、教室に入りにくい状況に陥ったりすることがある。	①サポートルームの利用について、時間割を確認しながら自分で計画を立てさせ、生徒が実行するための支援方針について検討する。 ・生徒自身の目標について考える意識と、現在の自分を振り返る意識とを高めさせる。	①支援者リストや生徒支援会議を通して支援係と学年団・担任とが連携し、早期対応ができる。 ・学校自己評価アンケートで、①「自分の課題」、④「安心できる場所」の項目で、生徒の肯定回答率が80%以上になる。	①7月の学校自己評価アンケートで、「自分の課題を考える」と、「学校は安心できる場所」について、肯定回答率が80%を上回った。多くの生徒が安心して学校生活を送り、主体的に学ぼうという意思を持っていると言えるが、今後も継続して少しでも100%に近づくように対応する。	B	① 11月のアンケートでは、「自分の課題を考える」が少し減少し、80%を下回った。学校生活サポートルームを利用する生徒や、教育相談、通級指導、SSTの授業等、折に触れて自己目標となりたい自分像を確認している。目標に近づくために出来ていること、さらに、自分のどのような面を伸ばすか、どのように学校生活を送るかなど、ふり返りの時間を持たせている。支援係として生徒の安心とともに、主体的に学校生活が送れるように支援する。	A
産社・総探・地域連携	(2) ①産社・総探で学ぶことで、将来の目標や夢を見つけ、進路実現に向けて努力することができる。	①社会人講師による講演会や、地域の工業団地の見学、地域での貢献活動等の機会を各年次で設定する。	①向学校度アンケートの「みんなで何かをするのは楽しい」の肯定回答率が80%以上になる。また、活動の成果を発表することができる。	①1年次は1学期に社会人講師による講演会を2回実施した、また、昨年度新設した御津地域の企業訪問の訪問先企業を4社から6社に増やし、全員が企業訪問を経験できた。2年次は地域行事体験活動を授業に位置付けて、一人ひとつの地域行事等を選んで参加した。	B	①1年次は全員が9月に企業訪問をしたことで、11月の職場・上級学校訪問がより主体的な班別自主研修となった。また、週休日の地域のイベントに2年次全員が参加することで、御津地域行事を体験し、地域からも好評を得た。今後、これらの経験が、将来の目標や夢につながるよう、取組を昇華させていきたい。	B

3 自分のよさに気づき長所を伸ばそうと努力する生徒の育成							A
(1) 自分のよさに気づくことができる授業と特別活動			(2) 生徒の長所に気づかせ伸ばすことのできる進路ガイダンス				
担当	目標・現状	具体的計画	今年度の達成基準	中間達成状況	評価	最終達成状況	総合
教務課	(1) ①授業を通して学んだことやわかったこと、できるようになったことが自覚できる。 ②授業で共感的な人間関係づくりを行い、自他のよさに気づかせる。	①授業において形成的評価を行う声かけを実施したり、振り返りコメントを返したりと生徒ができたこと、成長したことを自覚させる。 ② ペア学習やグループ学習、協働的な活動など学習形態を工夫した授業を行う。	①向学校度アンケートの「授業がよくわかる」の肯定回答率が80%以上になる。また、授業アンケートにおいて「授業を受けて学力や技能の向上を感じますか」の肯定回答率が80%以上になる。 ②学校自己評価アンケートの10の質問の肯定回答率が85%以上になる。	①向学校度アンケート該当項目では80%を全学年で超えた。授業アンケートの該当項目では肯定回答率が92%であった。 ②該当項目では3学年の平均が82%であった。	B	①向学校度アンケート該当項目では1・3年次は90%程度、2年次は80%弱の肯定回答率であった。授業アンケートでは前回調査と同じ数値であった。知識構成型の授業が増え、学んだ知識を統合し、自己表現を行う回数が増えたことが要因である。 ② 該当項目では3学年の平均が78%と下がった。学校行事の過密日程も影響し、授業のゆとりがなかったことも一つの要因であるが、十分に目標を満たした。	A
生徒課	(1) ① 適時適当な内容のLHRが実施できておらず、後手の指導になっている。 ② 自分のよさを披露する場面が少なく、披露する対象も限定的である。	LHRと学校行事の充実と工夫 ① 性教育、いじめ、交通のLHRを戦略的に配置し、安心した生活を送れるスキルを獲得させる。学校祭のさらなる充実を図り、保護者や地域の方々に生徒のよさを見てもらえる機会を創る。	① 生徒の実情にもとづいた性教育実施計画書を作成し、LHRと各教科を連携させ、適切な内容とタイミングで実施できている。向学校アンケートで「文化祭、体育祭、球技大会等の行事は楽しい」と「文化祭、体育祭、球技大会等の行事に積極的に参加する」の肯定回答率が80%を超えている。	①・性教育や薬物乱用防止等のLHRを計画立て、実施することができた。 ・学校祭に関する向学校アンケートの該当項目で肯定回答率が80%を超えている。	B	①向学校アンケートで「文化祭、体育祭、球技大会等の行事は楽しい」と「文化祭、体育祭、球技大会等の行事に積極的に参加する」の肯定回答率が80%を超えている。 既存のルールの周知徹底についてはスマホ利用については徹底できたが、身だしなみについては今後も検討・徹底の余地がある。	B
進路課	(2) ① 進路意識や進路先の理解が不十分で、自分の長所が活かせる進路先が見いだせていない生徒が多い。	①キャリアガイダンス・進路ガイダンス・進路フェスタの実施。他部署（教科や年次団）と連携し、企業や地域の方に直接接することができる機会を設ける（御津トーク的なもの）。	①それぞれの事後アンケートやまとめプリントに、進路意識の向上や希望分野の理解の深化が見られる。	① 産業社会と人間（1年次）において、企業・学校訪問を2度実施、OTEX（2年次）参加。12月の進路フェスタ、3月の進路ガイダンスの準備に着手。直接企業・学校と接触する機会を増やす。	B	①進路フェスタ、キャリアセミナー、進路ガイダンスを実施し、生徒の興味関心のある学問分野や業種について、上級学校や企業から説明を受けたり進路に必要な資質や能力などを確認したりする講座を開講した。進路意識調査では、2年は希望先未定が減じ、1年では希望先変更が多くみられるなど、具体的な情報を得て理解が進んでいる。特別な配慮の必要な生徒の進路については、昨年度に引き続き保護者向け進路説明会を実施。就労支援コーディネータの支援を受けて、障害者向けインターンシップや就職活動も始めている。	A
産社・総探・地域連携	(1) ① 地域の方や企業の方と関わった経験を適宜振り返ったり、まとめたりして校内外で発表する。	① 各年次において、発表活動の機会を設定する。	① 年間で一人が複数回、地域の方と関わったり、校内外で発表したりする活動ができている。	①各年次で一人1回は地域の方等の、異年齢の人と関わる活動ができている。今後は学んだことを地域内外で積極的に発表できるようにする。	B	① 地域での学びや地域の方との協働の実績 1年次：御津マラソンボランティア（12月） 御津地域企業訪問（9月） 職場・上級学校訪問（11月） それぞれの機会でも振り返りや発表の場を設けた。 2年次：御津地域行事体験（10月、11月） 総合的な探究の時間の取組（御津ホールディングス） 総合学科研修会（12月） 3年次：総合的な探究の時間の取組（地域学） 成果発表会（12月） 夢育PBLフォーラム（12月）	A

4 同僚性を大切にする職場風土							B
(1) それぞれのキャリアやスキルを尊重する風土							(2) 令和型の学校に向かい学ぶ姿勢を大切にする風土
担当	目標・現状	具体的計画	今年度の達成基準	中間達成状況	評価	最終達成状況	総合
教務課	(1)、(2) ①それぞれの先生の良さやスキルが共有できていない。 ②教職員同士の相互補完が行われ、心理的安全性をさらに高める必要がある。 ③オープンスクールなどの広報入試、式典などの各行事の反省を適切に次年度に生かしていくことが必要。	①授業公開週間の運用方法を工夫し、相互に授業公開する機会を創出する。 ②気軽に話ができて、互いに助けを求めやすい職員室風土を醸成する。 ③業務の見直しや削減などを積極的に実施する。	①端末活用や生徒指導の4つの視点型授業などねらいの焦点を絞った授業公開を学期に1度実施する。 ②学校自己評価アンケートにおける「教員の働きがい」の肯定回答率が80%以上になる。 ③行事等の反省が、会議等で共有され、次年度の計画に生かされている。	①夏季休業中の教員研修で授業改善と生徒指導を結びつけた内容で実施するとともに、若手教員の授業実践を共有する研修を実施し、目線合わせを行った。 ②肯定回答率が57%と昨年度(74%)から激減した。 ③フォームや会議等で教員の意見を集約する機会を設けた。	B	①左の研修をもとに各教員が授業の柱やポイントを明確にした状態で簡易指導案を作り、授業公開を行った。授業観察をしたのべ教員数が50を超えた。 ②肯定回答率が59%(昨年度70%)	B
生徒課	(2) 情報提供や議論の研修は多いが、その成果を確認・分析をする研修がない。	ニーズに合った校内研修会の実施 考査ごとの研修において次学期の取組につながる内容にする。	これまでの取組みの効果や、学校課題についてじっくりと考える、校内研修を行うことで次学期や次年度の計画に生かしている。 今年度は教員スポーツレク大会を開催する。	昨年からの校内研修の流れもあり、多くの教職員参加し自己研鑽の場となっている。 教員スポーツレクは行っていない。	B	校内研修が自己研鑽の場となり本校としての方向性を共通認識することができている。	A
進路課	(1)(2) ①進路指導や進路を見据えた教科指導の協力体制を強化する必要がある。 ② 校内外の研修の機会はあるが、受講しにくい。最近の情報に適切なタイミングでアクセスできる体制が必要。	①会議や日々の連絡・コミュニケーションを行うことで、適切な場面でより効率的な業務分担を行う。 ②教員のニーズと都合に合わせて、進学や就職の情報を提供する校内研修の機会を設ける。	①定例会議や随時の打ち合わせで、それぞれの担当部署、年次団のとりくみ情報を交換し、手法を学び合うことができている。 ②進路指導に必要な最新の情報が整理され、適切なタイミングでアクセスできたり、適切な部署・係と連携したりする体制がある。	① 定例会議で情報交換や協議ができており、3年間を見据えた取り組みづくりが強化されている。 ② 部署や年次団のとりくみ状況は課長が適宜確認し協議して進めている。必要に応じて部署・年次をまたいで情報提供したり、連携したりしている。	A	LHRなど、年次単位で行う授業や行事については、今年度の実践を踏まえて、課内で議論し改善していきたい。来年度についても引き続き生徒の進路希望や実態に合わせて、他課・年次と連携しながら、より効率的に業務が行えるように工夫していきたい。	B
学校生活サポートルーム	(1)(2) 対人関係、家庭環境、心身の健康状態など、生徒が、自分の努力だけで学校生活を安定させることができなくなることがある。	①SSW, SCの専門的な知識や、医療を含む外部機関との連携を図りながら、それぞれ役割を持ってチームとして支援に当たる。	①会議資料や支援リストを活用しながら、定期的に校内で情報交換をして早期対応に当たることができている。また、支援や指導における互いのスキルを尊重、共有しながら、共に学び合う意識が高まっている。	①教務課長、生徒課長、年次主任、養護、SC、SSW、特支担当で構成する生徒支援会議を月一回行った。その場でSC、SSWと情報共有できるため、支援方針が立てやすかった。今後も継続する。	B	①学校自己評価アンケートで「学校は助けたり相談に乗ったりしてくれる」「安心できる場所」が、今年度は全て80%を達成した。次年度に向けて、支援や指導のスキルを継続するよう、多職種連携を含め、チームとして取り組む。	A
産社・総探・地域連携	(1)(2) ① 学校運営協議会でキャリア教育と地域連携に特化して議論を進める。 ② 産社・総探(ルネス学)における地域貢献の機会を増やし、内容を充実させる。	① 長期インターンシップに代わる新たなインターンシップを計画する。 ② 地域との連絡窓口として地域協働活動コーディネータと協働・連携し、本校に生徒にとって望ましい地域連携の機会を設定する。	① 長期インターンシップに代わる新たなインターンシップが長期休業中に設定できる。 ② ルネス学における地域貢献の機会が昨年度より増加する。	①長期インターンシップに代わる新たなインターンシップを夏季休業中に設定した。参加者は昨年度の4名から22名と増加した。来春の長季休業中にも設定し、年間2回の実施計画を立てる。 ②高齢者施設でのワークショップ活動や文化祭での模擬店での実践、地域住民の要望に応える活動等、地域貢献の機会が増加している。	B	① 来年度の休業中の長期インターンシップの参加者を増やすことで、自己の進路や職業について考える機会を増やしたい。 ②来年度の2年次は、新たな系列選択に基づく総合的な探究の時間が始まる。これまでの地域貢献の取組を継承しつつ、系列の特色を活かした活動を取り入れながら、3年次のグループ別探究につなげて、学びを深める。	B